

2012年 5月 1日 Vol.0052

静岡刑務所での毎日の生活パターンについて述べてみたい

刑期の約3分の1が経過した私の静岡刑務所での毎日の生活パターンについて述べてみたい。

まず平日であるが、午前6時40分に起床する。音楽が流れ起床合図があると寝具を所定の位置に整理整頓し部屋を掃除し、洗面、歯磨きをして部屋着に着替え点検の合図を待つ。午前7時、刑務官による点検がある。

「点検用意」の号令があると服装を整え、定められた位置で廊下に向かって正座又は安座する。刑務官3名が廊下を歩いて「番号」と叫びながら各房毎に点検があるので「1」と唱え、「点検なおれ」の号令があれば通常の指定位置に戻る。午前7時10分、朝食。配膳係の受刑者が廊下側にある部屋の配膳台に味噌汁、ご飯、その他ふりかけ、納豆等を配る。朝食を終えると洗面台で食器（プラスチック）を洗剤で洗い配膳台に戻すと配膳係が回収する。午前7時40分、入室検身がある。検身とは物を不正に所持したり、隠し持ったりしていないか、刑務官が検査するのである。

その後、更衣室において部屋着を脱いで作業着に着替え、午前8時頃工場に行き作業が始まるのだ。午後4時50分、夕食前の点検がある。朝の点検とほぼ同じであるが、自己の称呼番号を唱える点が違う。午後5時、夕食である。午後5時30分、内省がある。内省というのは今日1日を反省するということらしい。まず音楽が流れその後、正座又は安座して静かに内省する。午後5時40分、仮就寝である。寝具を敷いて横になることができるしまた読書をしてもいい。午後9時、就寝である。天井の蛍光灯が半減され読書をすることは禁じられ午前6時40分の起床までの9時間40分寝るのだ。当初は時間が余りにも長いので深夜に目が覚めることもあったが慣れとは恐ろしいもので眠れるようになった。時計がないので今何時なのかがさっぱりわからないのである。

休日（土、日、祝日）は午前7時20分起床、45分点検、50分朝食、同11時30分昼食、午後4時20分夕食、同4時50分点検、同5時内省、同5時10分仮就寝、同9時就寝である。平日と比較すると起床時間が若干遅い。また午前9時から同11時、正午から午後3時までの間は寝具を敷いて横になることができるのだ。大阪拘置所（搬送待ち受刑者）ではずっと寝具を敷いて横になることができたが、その点静岡は異なっている。何度も寝具を上げたり、敷いたりしなければならない。

又、大阪拘置所では面会時間は10分間であったが静岡は30分間で面会に来てくれた人とゆっくり話することができる。（大阪では多くの面会者を捌くのに時間が取れないのであろうか）本の差し入れは大阪では1回に10冊以内であったが静岡では3冊までとなっていて矯正管区あるいは刑務所が異なると違うのである。矯正局において統一できないのであろうか。

それはさておいて、このような拘束された毎日の生活の中で自由時間には読書をしたり書き物をしたりしているのだが今回は長崎地検で主任検事として捜査したバスジャック事件のことを思い出しながら書いてみたい。

私は昭和52年4月から54年3月までの2年間長崎に勤務した。この事件の前に日本赤軍による「よど号ハイジャック事件」が福岡空港で発生したが、今回お話しするバスジャック事件も当初は過激派による犯行かと激震が走ったものだ。

バスジャック事件の通報が警察から地検にあったのは昭和52年10月15日午後2時頃であった。その状況を見守るために次席検事室に検事が集まり朝まで徹夜で待機した。「又過激派による犯行か」と大々的に報道された事件であったがすでに30年以上も前のことであるので忘れられている事件だと思う。

なお似て否なる「よど号ハイジャック事件」は日本中に激震の走った余りにも有名な事件であるがこれについても述べてみたい。

赤軍派リーダー四宮高麿ら9人は日航機「よど号」をハイジャックして北朝鮮への亡命に成功するのだ。

それは昭和 45 年 3 月 31 日午前 7 時 21 分羽田発福岡行き 351 便の日航機ボー

イン
グ 727 ジェット旅客機「よど号」（乗員 7 人、乗客 131 人）が離陸して間もない 7 時 33 分、富士山上空を飛行中に赤軍派 9 人が日本刀、ピストル、ダイナマイト（いずれも偽物）を振りかざして乗客に「私たちは共産主義者同盟『赤軍派』です。私たちは北朝鮮に行き、そこにおいて労働者、国家、人民との強い連帯を持ち軍事訓練を行い、今年の秋、いかに国境の壁が厚かろうと再度日本海を渡って日本に上陸し、断乎として前段階武装蜂起を貫徹せんとしています。我々はそうした目的の元に今回のハイジャックを敢行しました」と強く叫んだのだ。石田真二機長は平城に行くには燃料不足だと赤軍派に福岡行きを説得し、午前 8 時 59 分福岡空港に着陸給油。空港には機動隊が 1000 人待機しての厳戒態勢が敷かれたが、政府も日本航空も初めてのハイジャックであったためどう対応すれば良いのか戸惑った。

午後 1 時 35 分、病人、女性、子供ら 23 人を解放。同 59 分、突如福岡空港を離陸し北朝鮮に向かうが、韓国管制塔の誘導により午後 3 時 16 分ソウル郊外の金浦空港に着陸した。韓国側は北朝鮮の服装で偽の歓迎プラカードを立てて出迎える等の偽装工作をするが赤軍派は空港内に米軍機を発見し北朝鮮ではなく韓国であることを見破るのだ。翌 4 月 1 日韓国側は「乗客を解放すれば北朝鮮に行かせる」と説得。赤軍派はこれに応じないため東京から山村新治郎運輸政務次官ら政府関係者が自ら「身代わり」になると名乗り出て赤軍派と交渉。3 日午後 2 時 28 分残りの乗客 99 人全員とスチュワーデス 4 人

が全員解放され山村政務次官がその「身代わり」になったのだ。乗り込んだ次官に赤軍派は「ご迷惑をかけて本当にすみません」とねぎらいの言葉をかけると次官は「いやいや、これで次の選挙は大丈夫だよ」と答えたという（山村新治郎の人気は凄まじく「身代わり新治郎」というレコードまで出たくらいで次の選挙ではトップ当選を果たしたのだった。ところがその後、北朝鮮との国交正常化を目指した自民党の訪朝団の団長として「金日成主席生誕 80 周年慶祝行事」に参加する予定であったがその出発前にノイローゼだった次女に指されて死亡するのである）

午後 6 時 5 分「よど号」は金浦空港を離陸し 7 時 20 分北朝鮮に到着し約 3 日間に渡るハイジャックは終わり赤軍派は亡命に成功するのだ。4 日午前 9 時 10 分「よど号」は山村政務次官を乗せ羽田空港に到着した。

警視庁公安部は採取した指紋などから 9 人全員の身元を割り出すが指紋鑑識をしたのが「オウム事件」等で活躍した「指紋の神様」と呼ばれた警視庁鑑識課の塚本宇平である。その後、赤軍派は病死するなどし、北朝鮮には 4 人だけが残っている。なお、石田機長は国際線のパイロットになる予定であったが有名になったことがあだとなって女性スキャンダルが発覚、日本航空を退職するのだ。山村政務次官、石田機長とも国民的英雄となったが人生どうなるかわからないものである。

さて、話は私の事件に戻ってバスジャックの犯行状況である。

バスジャックを企てた A、B 両名は佐世保駅西肥バス営業所午前 10 時発、長崎駅午後 0 時 25 分着の長崎行特急バスに乗り込み、A がバス前部、B が後部に座る。A は拳銃を構え乗客に向け「手を挙げろ」、運転手に向け「俺の言うとおりに走らせろ」と脅す。B も拳銃を構え「静かにせんと撃つぞ」と脅す。A が「これは爆弾だぞ、このスイッチを押したらバスもろとも木っ端微塵になるぞ」といってロープで 5、6 人の乗客を後ろ手に縛る。

午後 0 時 45 分頃 A の指示で長崎市内の給油所内にバスを乗り入れる。運転手に「乗っ取りだと言え」と指示し運転手が給油所の所長にその旨を伝え、所長から 110 番通報される。A は運転手に手錠を掛ける。

午後 1 時 15 分頃、長崎県警察本部に 124 名のバスジャック事件対策本部を、現場給油所事務室に機動隊を含む 320 名のバスジャック事件対策現地本部を設定、乗客解放を呼びかける説得活動が開始される。幼い子供 2 名が解放される。

午後 2 時 30 分頃、A が乗客に書かせたメモが警察官に渡される。そのメモによると「我々は連合赤軍特攻部隊である、下手に手を出すと乗客を爆破する。私は部隊の隊長である、敵の最高責任者と話し合う。もし下手な手出しをすると日本 37ヶ所で一斉に爆破事件が起こるであろう。今度のジャパンエイトマルポン 130 作戦に関しては日本政府の処置に感謝する（よど号事件の件）瀬戸山法務大臣、新自由クラブの代表、細川隆元の 3 名をすぐ呼べ、話し合いたい。3 秒間あればバスもろとも爆破できる」とあった。

警察により、水、ジュース、ビニール袋、ポリバケツ、寿司30人分、毛布等が差し入れられる。

午後11時頃から翌午前1時40分にかけて乗客5人が開放される。

16日午前0時20分から1時20分まで警察は強行突入の事態を想定し乗っ取られたバスと同型車を取り寄せその構造等を点検すると共に5班30名の検挙隊を編成し西肥バス長崎営業所において実地訓練を実施する。

午前4時頃警察は強力な説得活動を開始。するとA、Bは乗客に拳銃を突きつける等の過激な行動をする。

午前4時33分、バスの乗降口前付近で説得中の警察官がAに「乗客を撃つなら警察官を撃て」と叫んだ瞬間、Aは同警察官に拳銃を1発発砲する。これを見た県警捜査1課長は強行突入を指揮した。

警察官3名がAに対して合計7発を発砲したがその内の1発が右頸部に命中し、右頸部貫通による失血でAは死亡した。

Bは強盗・監禁等の現行犯によりその場で逮捕され運転手及び乗客合計16名を救出した。乗客全員に怪我がなかったのが幸であった。

同日長崎大学法医学部においてAの死体解剖が実施され、私も立会ったが特異な点がなかったからだと思うが解剖についてはよく記憶してない。

さてAとBはどのような人物だったのであろうか。

この事件は、日本赤軍の「よど号ハイジャック事件」を模倣したことはその犯行内容からして疑う余地はなくAが首班でBが従犯であることもあきらかである。

A（当時31歳）は中学校卒業後集団就職で機械工として働き17歳当時強姦等の事件で逮捕され医療少年院に送致されている。その理由は鑑定の結果精神分裂病だと判定されている。それによると、昭和37年5月頃から精神分裂病を発病し、会社を首になるという被害妄想、世間の人を自分が馬鹿にしているという注視妄想、自分が空を飛んで正義の味方になり悪

者をやっつけるという空想好きの傾向があり I Q は 69 で精神薄弱との境界にあつて空想内容が非常に子供じみている、ということであつた。

また A の父の実弟とその息子も約 15 年前から精神分裂病のため入院して、A は赤軍とは全く関係はなく思想的な背景もなかつた。

他方 B (当時 39 歳) は中学校を卒業後、塗装工、土木人夫として働いたが事件当時は西海橋公園を根城にホームレス生活をしていた。I Q は 66 で赤軍との関係もなく思想的背景もなかつた。

事件発生当初は過激派の犯行かと激震が走つたが、かような人物二人の 3 億 7000 万円という大金欲しさの犯行であつたのだ。

このバスジャック事件については当時の資料を 1 部入手することができたので記憶を喚起して書くことができたのであるが、B に対しては確か懲役 6 年か 7 年を求刑し実刑判決となつた。

冒頭にも記したが、わずかな自由時間に私は良い事務官に恵まれて楽しく仕事のできた長崎での出来事を懐かしく思い出しながら書いた。